# 市内遺跡調査報告書

## 第 13 集

2022

茨城県石岡市教育委員会

# 例　　言

1. 本書は石岡市教育委員会が行った下記の遺跡調査に関する報告書である。

Ⅰ 常陸国分寺跡（ガラミドウ地区）

・調査地　茨城県石岡市府中三丁目 943 番

・調査期間　①令和元年 10 月 9 日～令和 2 年 1 月 6 日（実働 12 日）

②令和 3 年 2 月 8 日～ 4 月 9 日（実働 12 日）

・調査担当者　小杉山大輔

Ⅱ 小目代遺跡（第 6 地点－ 3）

・調査地　茨城県石岡市貝地二丁目 1980 番 1

・調査期間　平成 25 年 1 月 8 日～ 1 月 17 日

・調査担当者　谷仲俊雄

2. 調査は文化庁・茨城県文化課の指導のもと、石岡市教育委員会が主体となって実施した。
3. 現地調査は、小杉山大輔・谷仲俊雄が担当した。また、調査・整理の参加者は、下記の通りである。

五十嵐正　岡田正夫　北山敏道　小松﨑利夫　酒井　洋　牧田保身　山口晋一　吉田幸男

大野幸枝　木村友子　鈴木真紀子　長谷川則子

なお、遺構・遺物の実測・トレースは谷仲・木村・長谷川が、採拓は大野・木村・鈴木・長谷川が行った。

4. 本書の執筆はⅠを小杉山、Ⅱ・Ⅲを谷仲が行った。編集は谷仲が行った。
5. 調査に関する遺物・図面・写真等の資料はすべて石岡市教育委員会で保管している。
6. 現地調査及び報告書刊行に当たっては下記の方々からご指導・ご協力をいただいた。ここに記して、感謝申し上げる次第である。（敬称略・五十音順）

茨城県教育庁文化課　小美玉市玉里史料館　文化庁文化財部

浅野啓介　川井正一　川口武彦　川崎純徳　黒澤彰哉　小玉秀成　齋藤和浩

坂本光男（株式会社サカモト）　本田信之　佐々木義則　佐藤　信　新垣清貴

須田　勉　比毛君男　舟橋　理　山下信一郎

7. 事務局は下記の通りである。

児島裕治（教育長）、豊崎康弘（教育部長）、吉澤房江（次長）、原田和宣（文化振興課長）、小杉山大輔（文化振興課課長補佐）、谷仲俊雄・橋本裕介（文化振興課係長）、鈴木万梨映・金澤史典・中村光宏・竹内智晴・中村菜摘・金子悠人（課員）

# 凡　　例

1. 本書使用の方位は磁北である。ただし、図 1 ～ 3・12・13・17 については座標北である。
2. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器・石器・石製品・銅製品 1 ／ 3、瓦類 1 ／ 6 を基本とした。

なお、それ以外の縮尺の場合はその都度、実測図に縮尺を明記した。

# 目　　次

例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　常陸国分寺跡（ガラミドウ地区）
　1　調査の経過 …… 1
　2　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
　3　調査の成果 …… 4
　4　総　括 …… 11
Ⅱ　小目代遺跡（第６地点－３）
　1　調査の経過 …… 13
　2　調査の成果 …… 15
　3　総　括 …… 15
Ⅲ　埋蔵文化財包蔵地の新規登録と範囲変更（令和３年度） …… 18
写真図版
報告書抄録

図１　本書所収の遺跡位置図

# Ⅰ　常陸国分寺跡（ガラミドウ地区）

## 1　調査の経過

### ⑴　調査にいたる経緯

平成 28 年度より石岡市教育委員会では特別史跡常陸国分寺跡保存活用計画の策定を開始した。文化庁の指示により、従来調査が及んでいなかった東側の住宅街の調査や平成 29 年度には空撮による測量も行っている。また、平成 30 年度から本格的に計画策定のための委員会を開催し計画の内容について協議を行った。この中で、現在の特別史跡指定地内をⅠ区とするとともに、主要伽藍の広がる可能性がある範囲をⅡ区とした。特に当地（石岡市府中三丁目 943 番）は過去に礎石が存在したこと、ガラミドウの地名から塔跡の比定地となっており、Ⅱ区の東側を設定するうえでも重要な位置を占め、調査する必要性が生じた。そのため、令和元年度はＴ－１から４までを設定し、遺構の確認を行った。さらに、令和２年 10 月９日には文化庁において追加指定について協議を行い、掘込地業の南端の確認も行うこととなった。これを受けて令和２年度にはＴ－５及び６を設置し調査を行った。

### ⑵　調査の方法

調査地内に掘削するトレンチを設定し、全て人力により調査を行った。出土遺構の範囲も確認する必要があったことから状況に応じてトレンチの延長も行っている。重要遺構に関してはサブトレンチを設定し断面の確認を行ったが、調査は最低限にとどめた。ただし、版築の規模の確認など状況に応じてより深くまで掘り下げを行っている。当地はかつて家屋が建っておりそれを解体したため、表土層は攪乱が酷く遺構の検出は困難であった。したがって、多くの表土の遺物は動いている状況であったが、敷地そのものは決して広いものではないことから表土一括で取り上げている。その他、版築中や旧表土中に出土した遺物は遺跡の性格を示す貴重な遺物であることから出土状況に応じて記録に残しながら取り上げている。

## 2　遺跡の地理的・歴史的環境

### ⑴　地理的環境

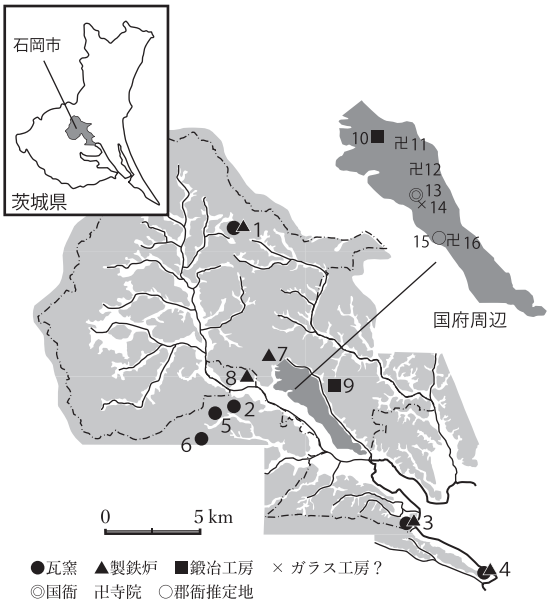
筑波山を源流とし、石岡市内を横断する形で南東に流れる恋瀬川周辺からその北側の園部川周辺の比較的平坦な台地は石岡台地といわれる。この石岡台地をさらに分断しているのが恋瀬川と並行して流れる山王川である。この恋瀬川と山王川の間が奈良・平安時代の国府と呼ばれる都市の中心地である。南東側から北上する形で茨城郡家の比定地である外城遺跡、郡寺である茨城廃寺跡、常陸国府跡、常陸国分寺跡、常陸国分尼寺跡、さらに北側には巨大鍛冶工房として有名な鹿の子遺跡群も確認されている。

今回、発掘調査の対象となったガラミドウ地区は従来確認されていた常陸国分寺跡の東側に相当する。現在の国分寺の境内から国道 355 号線を渡り東に向かうと下り坂となり、谷へと向かう。この下り坂に至る直前の台地縁辺部に当地区は存在している。

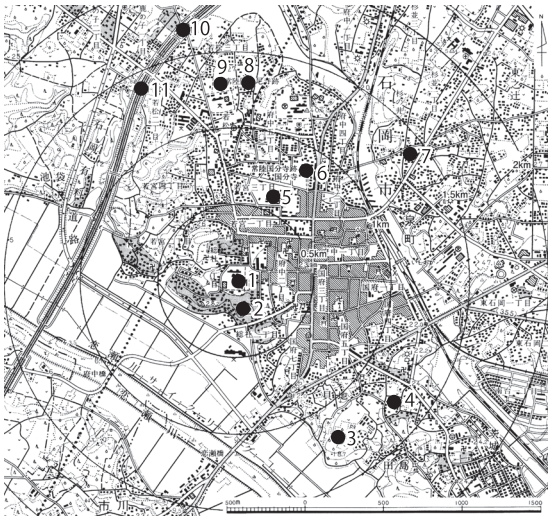
### ⑵　歴史的環境

石岡市史によると大和田家文書『府中平村香丸組村明細帳』に「がらみ堂是は同門中中町分木ノ地町普賢院支配」との記載がみられる。この文書の年代は推定としながらも元禄 13 年とされている。その後、斎藤忠をはじめとして広瀬栄一、今泉義文、黒澤彰哉により考察がなされている。現地はかつてアパートが建設されていたが近年は取り壊され更地となっている。

広瀬栄一は「伽藍御堂の地に塔趾を發見し」たとしており、礎石は「三個を缺く」ものの「方三間、一邊二十一尺六寸を算し、中間は他より五寸乃至一尺程狭い様である。榮礎は全然自然石のまゝで何等手を加へられていない」としている。３間×３間の総柱で中央に心礎が残存している状況が想定される。一辺が 21 尺６寸とす




1　瓦塚窯跡　2　松山瓦窯跡・松山廃寺跡　3　金子澤瓦窯跡
4　柏崎窯跡群　5　一丁田窯跡　6　関戸瓦窯跡
7　宮平遺跡　8　粟田かなくそやま遺跡　9　杉ノ井遺跡
10　鹿の子遺跡　11　常陸国分尼寺跡　12　常陸国分寺跡
13　常陸国府跡　14　府中城跡　15　外城遺跡（郡家推定地）
16　茨城廃寺跡



1　常陸国府跡　2　常陸國總社宮　3　外城遺跡（茨城郡家推定地）
4　茨城廃寺跡　5　国分遺跡　6　常陸国分寺跡
7　杉ノ井遺跡　8　尼寺ヶ原遺跡　9　常陸国分尼寺跡
10　鹿の子遺跡群３次調査地区（鹿の子Ｃ遺跡）
11　鹿の子遺跡群２次調査地区（鹿の子Ａ遺跡）

図２　国府及び主要遺跡

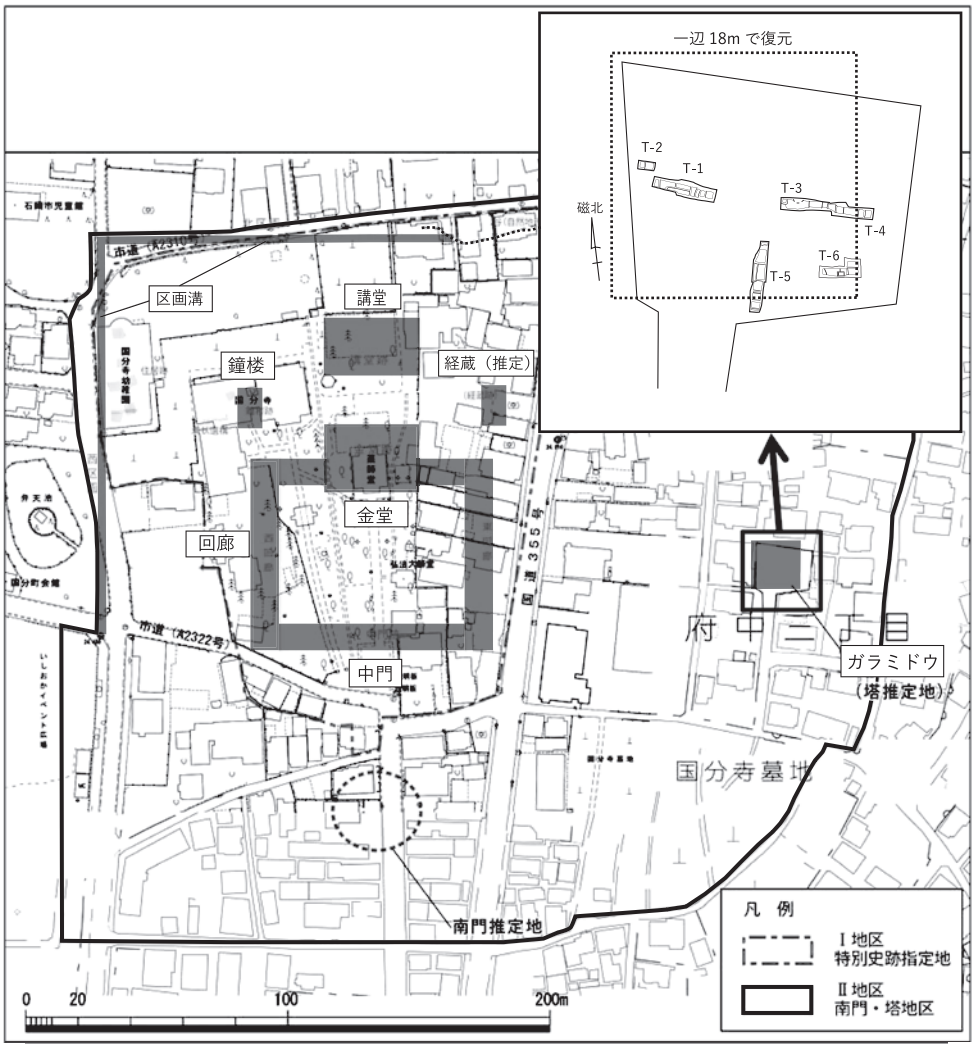



図３　ガラミドウ及び常陸国分寺跡主要伽藍位置図

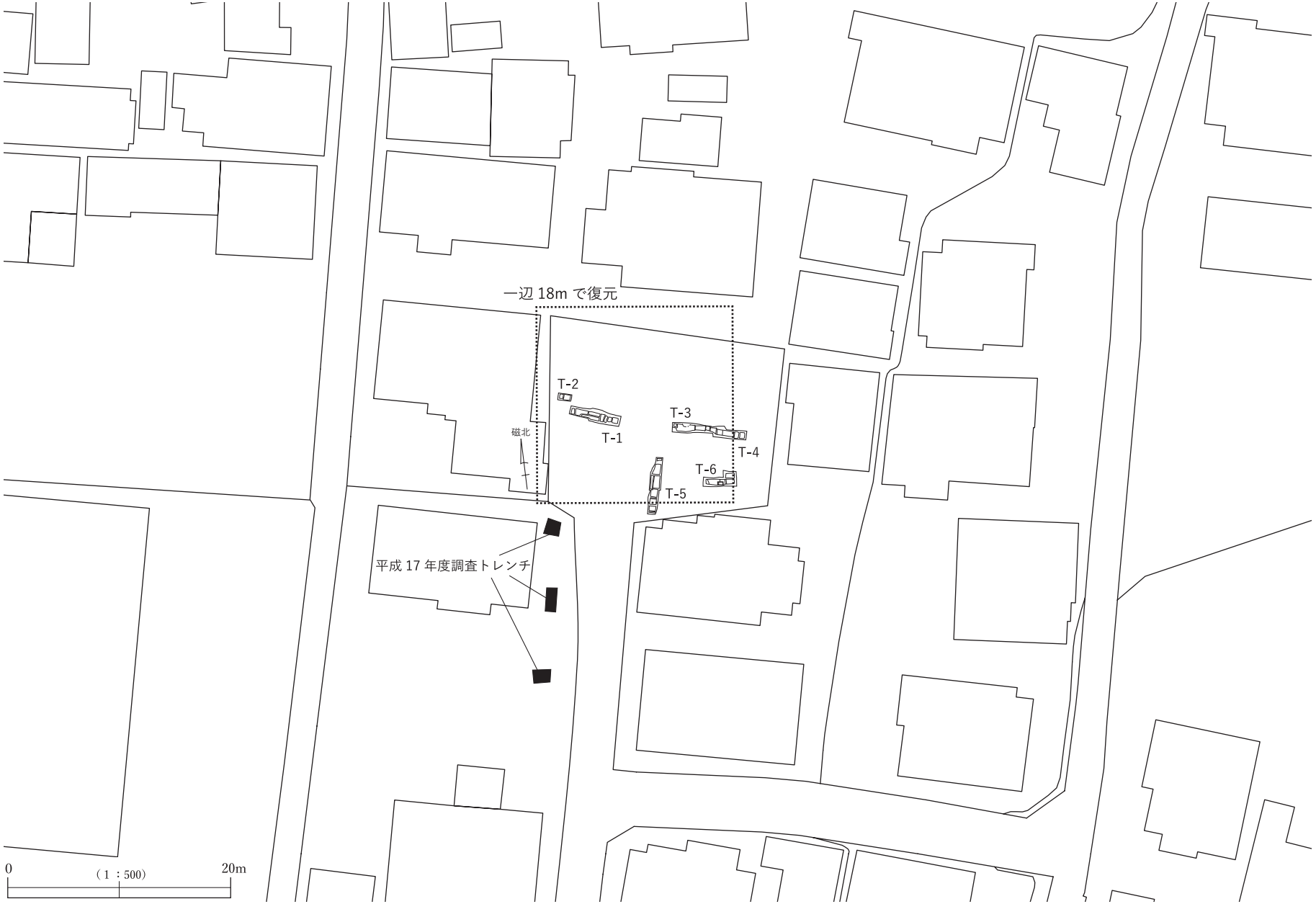



図４　調査区位置

ると 6.5 mほどとなることから七重塔の基壇としては小さく、後述する確認調査とも規模があわない。後世に礎石の現位置が動かされている可能性もある。ただし、広瀬自身は当地を必ずしも国分寺としては認識しておらず「私寺」の可能性も考慮している。

これに対し、斎藤忠は主要伽藍の配置や地割及びそれらの規模の比較から当地を国分寺の塔跡と位置付けている。

また、郷土史家である今泉義文が回顧録を記しており、「「がらみどう」は、伽藍御堂、又は伽藍見堂であるらしく、国分寺の地域だけに、同寺に取って重要な遺蹟である。だが史蹟として指定に漏れたことには理由があった。文部省黒板博士一行が、視察－調査にお見えになった時、ここをお見せしなかったのだ」としている。常陸国分寺跡の史跡指定に黒板勝美が関わっていたことを示す点では瓦塚窯跡（昭和 12 年、当時は県指定）と同様の傾向にある。

さらに、瓦の観点から研究を進展させたのが黒澤彰哉である。「伽藍御堂」と注記のある軒丸瓦が単弁二十葉蓮華文（7109 型式）を持ち、これが 9 世紀以降の瓦であることから、当地に存在するのは創建期ではなく、再建された塔の可能性を指摘している。

## 3　調査の成果

### ⑴　検出された遺構・遺物

#### －１　令和元年度の確認調査の結果

調査では敷地の東西方向にＴ－１から 4 を設けた。トレンチ番号は掘削した順番でつけている。Ｔ－１を掘削し

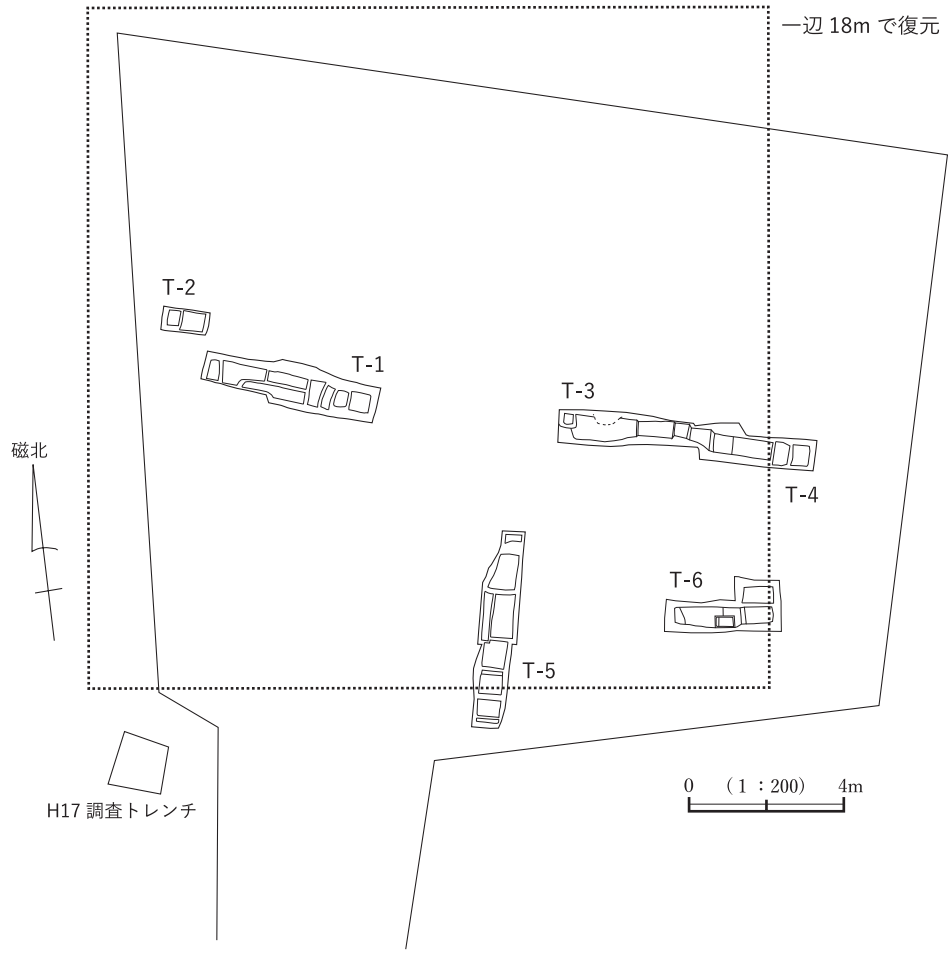
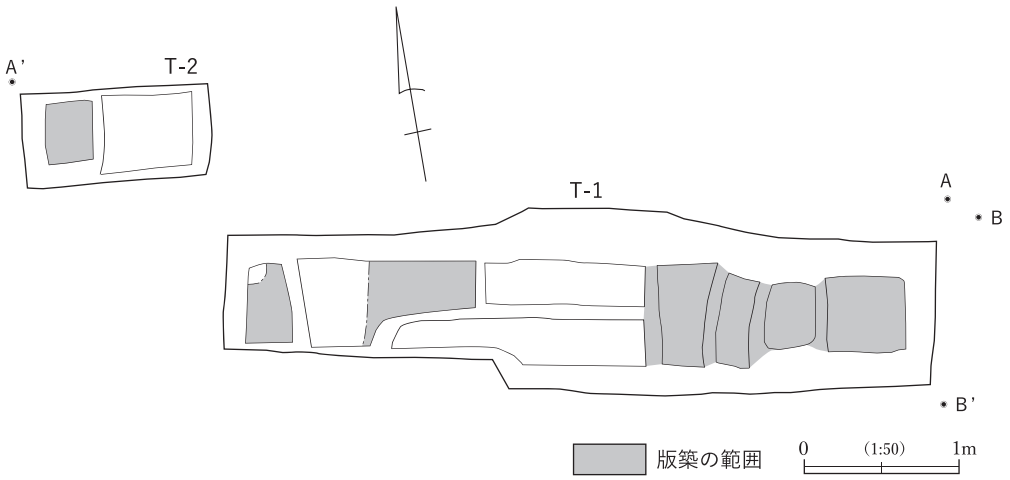


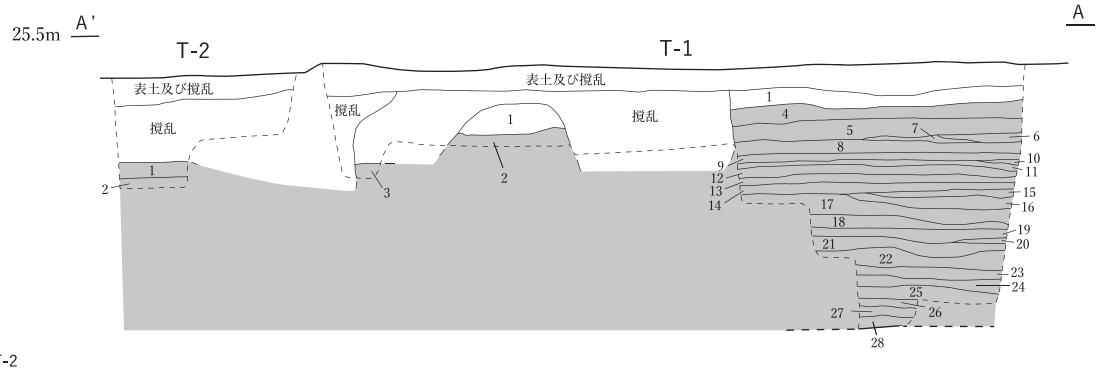

図５　トレンチ配置図

た段階で版築状の遺構が確認されたため、西端を確認すべくＴ－２を設けた。しかしながら、Ｔ－２においても同様の遺構が確認されたため遺構の西端は隣接地まで延びると判断した。次にＴ－３及び４を掘削し（この２つのトレンチは最終的に１つにまとめた）、遺構を確認した。その結果、Ｔ－４東側より漏斗状に掘り込む版築が確認されている。

このＴ－４の掘込部分を遺構の東端とすると西側の敷地境界までは約 15 mであることから、東西規模はそれ以上ということになる。なお、南側は平成 17 年度に南西側の個人住宅建設時に試掘調査を行った際に版築は確認されていないことから、敷地内に収まることが予想された。

また、版築の深さを確認するためＴ－１の中央部の掘削を行った。版築の幅は数 cm と薄いものから 15cm と比較的厚さのあるものまで確認された。最下層部分は湧水があったらしく鉄分の塊も検出されている。版築は非常に




T-2
1　黒色土：粘性・しまり強い。
2　黄褐色ローム土＋黒色土：粘性しまり強い。
※　１・２層は版築

T-1
1　黄褐色：粘性・しまり強い。近現代の整地層。
2　暗褐色土：粘性・しまり強い。版築。
3　黒褐色土：粘性・しまり強い。版築。
4　暗褐色＋黒褐ブロック＋黄褐ブロック：粘性・しまり強い。
5　黒褐色＋黄褐ブロック：粘性・しまり強い。
6　黒褐色：粘性・しまり強いが他層に比べるとややしまりが弱い。
7　暗褐色：粘性・しまり強い。
8　暗褐色：粘性・しまり強い。
9　黒褐色：粘性・しまり強い。
10　暗褐色＋黄褐ブロック：粘性・しまり強い。
11　黒褐色：粘性・しまり強い。
12　黒褐色＋黄褐ブロック：粘性・しまり強い。
13　明褐色：粘性・しまり強い。
14　暗褐色＋黄褐ブロック：粘性・しまり強い。
15　暗褐色：粘性・しまり強い。
16　黒褐色：粘性・しまり強い。
17　黄褐色ローム土：粘性・しまり特に強い。
18　黒褐色：粘性・しまり強い。
19　暗褐色ローム土：粘性・しまり特に強い。
20　黒褐色：粘性・しまり強い。
21　黄褐色ローム土：粘性・しまり特に強い。
22　黒褐色：粘性・しまり特に強い。23　暗褐色：粘性・しまり強い。
24　黒褐色：やや砂質の土。粘性は他層に比べやや弱いがしまりは強い。
　　水が流れ鉄分が酸化したため茶褐色化した部分あり。
25　黄褐ローム＋黒褐色：やや砂質の土。27 層と同様に茶褐色化した部分あり。
26　黒褐色：粘性・しまり強い。黄褐色ローム土多く含む。瓦を１点検出。
27　黒褐色：粘性・しまり強い。
28　黄褐色：粘性・しまり強い。版築として確認される最下層である。
※　２・３・４層以下が古代の版築である。４～８層はローム土が比較的多く含まれる。
　　９~15 層は薄く，黒色土・黄褐色土が交互に堆積する傾向にある。16~21 層は全体的にローム土が多い。25 層以下は全体的に黒っぽい。

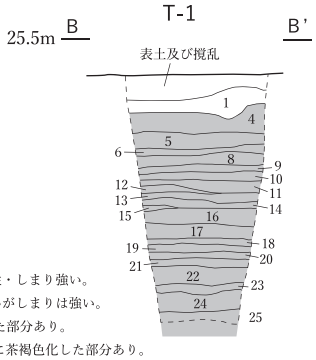



図６　Ｔ－１・２　平面及び土層図

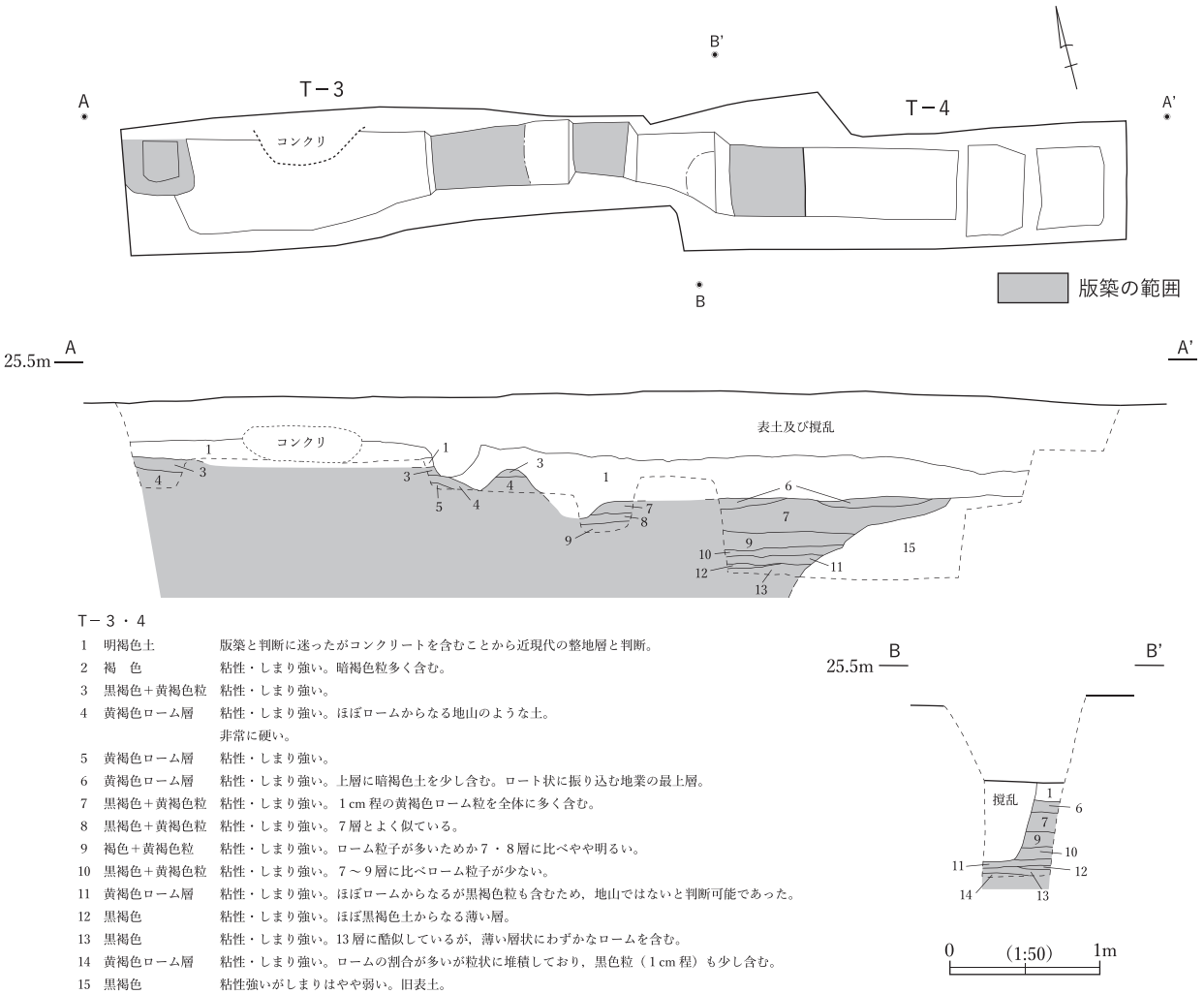


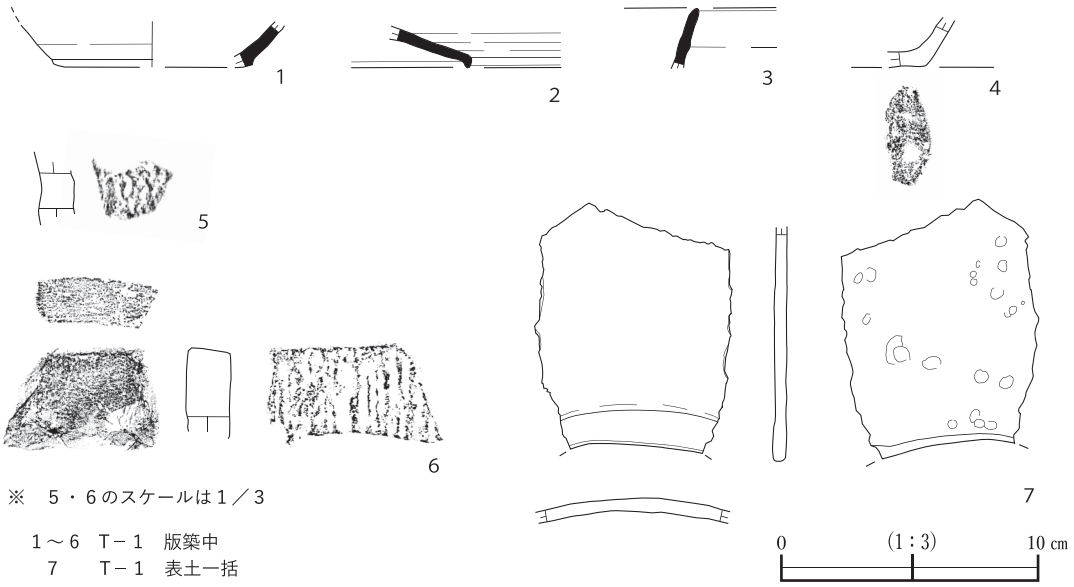

図７　Ｔ－３・４　平面図及び土層図

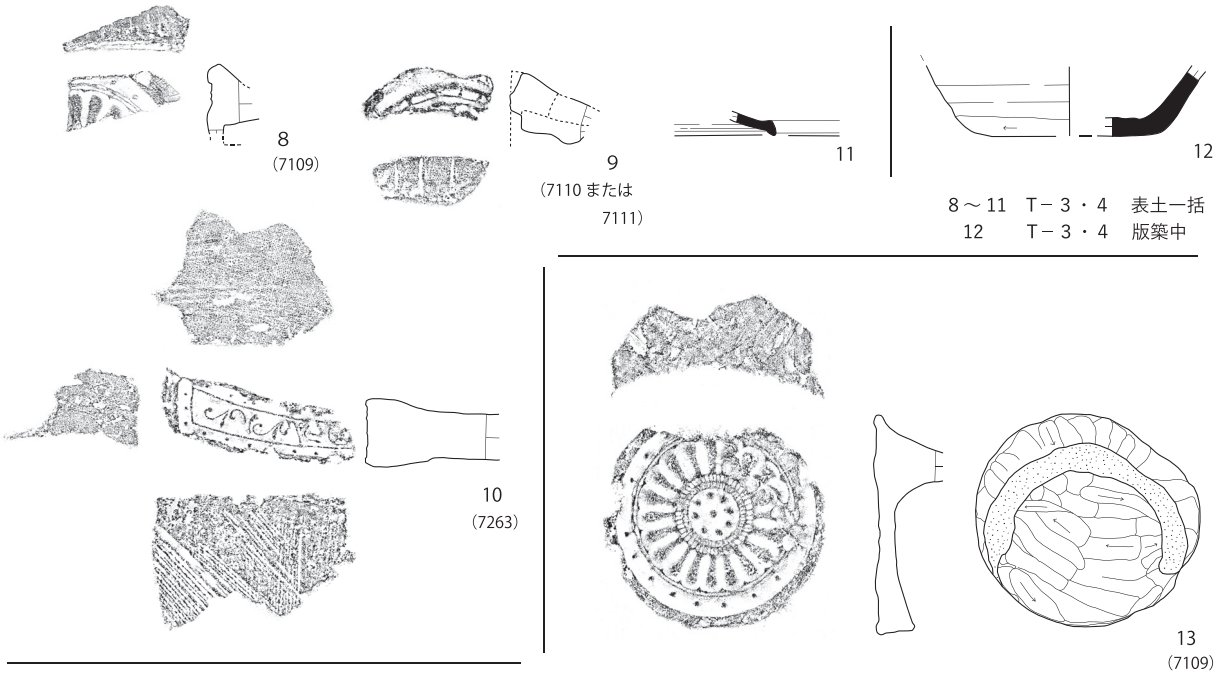
しまっており、深さは 1.4m を確認した。

１～６は全て版築中から出土したものである。１は須恵器の底部、２は須恵器・蓋、３は須恵器・坏である。5、6 は平瓦で長縄叩き一枚造りである。４は土師器・甕の底部である。７はＴ－１の表土掘削中に確認された銅製品である。かつてはアパートが建設されていた土地であることから多くの近現代の遺物とともに確認されている。しかしながら、国分寺の塔跡の比定地であったことから古代の建築部材や仏具などの可能性も考慮し図化した。遺物下端は口縁部に相当するが天地は不明である。口縁の形状は平坦ではなく波打つように湾曲しており、やや厚みがある。外面は磨きが施されており光沢を放つが、内面は口縁部のみが磨かれており、他の部分は凹凸がある。ここでは風鐸の可能性を考え口縁部を下にして図示した。２は８世紀後半から９世紀前半のものである。また、版築内の瓦の存在はこの遺構が国分寺創建期のものではないことを示している。

### －２　令和２年度の確認調査の結果

前年度の調査及び文化庁の指摘を受け、遺構の南側を確認することを目的としてＴ－５と６を設定した。やはり攪乱が激しく調査は困難であったが、まずＴ－５においては表土から 50cm ほどで版築が確認された。東側と同様に漏斗状にすぼまりながら掘削されている。ただし、上層部分は攪乱により削平されており、実際の版築の範囲はもう少し南側に広がる可能性がある。Ｔ－６についてはやはり表層が大きく削平を受けている。地表面から１mほど掘削を行いようやく版築の東側を確認した。しかし、版築との確証が得られずサブトレンチを設定し断面を確認した。結果、土層の様子から版築と判断できたが、さらに斜位に掘り込まれていた点もＴ－３・４及び５と同様であった。実際は１mほどさらに東側に本来の版築東端が存在したものと思われる。注目される点は版築が掘り込ま


1
2
3
4
5
6
7
※　5・6のスケールは1／3
1～6　T－1　版築中
7　　T－1　表土一括
0　(1：3)　10 cm


8
(7109)
9
(7110 または
7111)
11
12
8～11　T－3・4　表土一括
12　　T－3・4　版築中
10
(7263)
13
(7109)

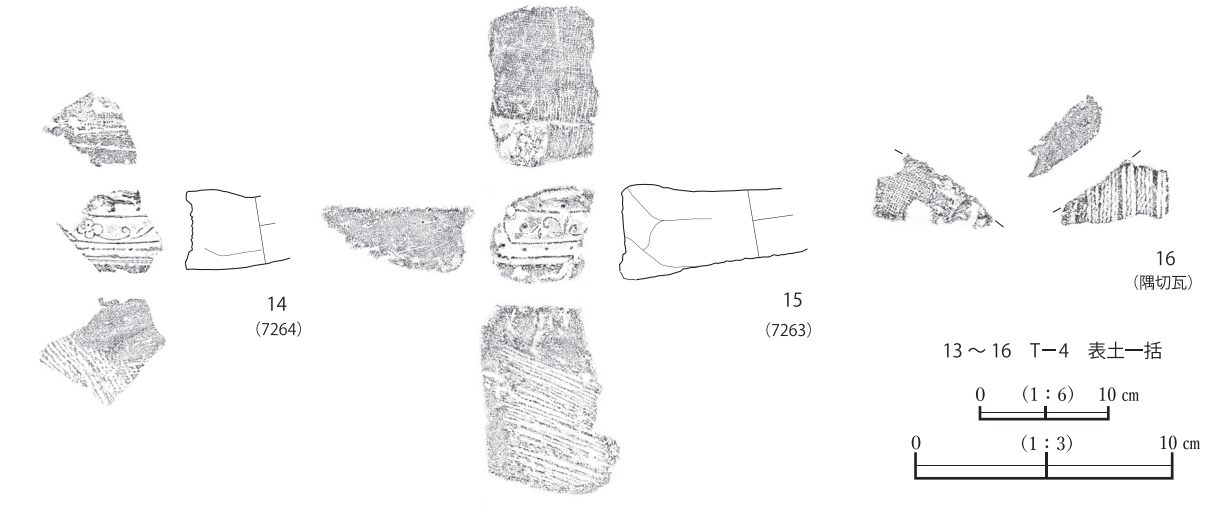
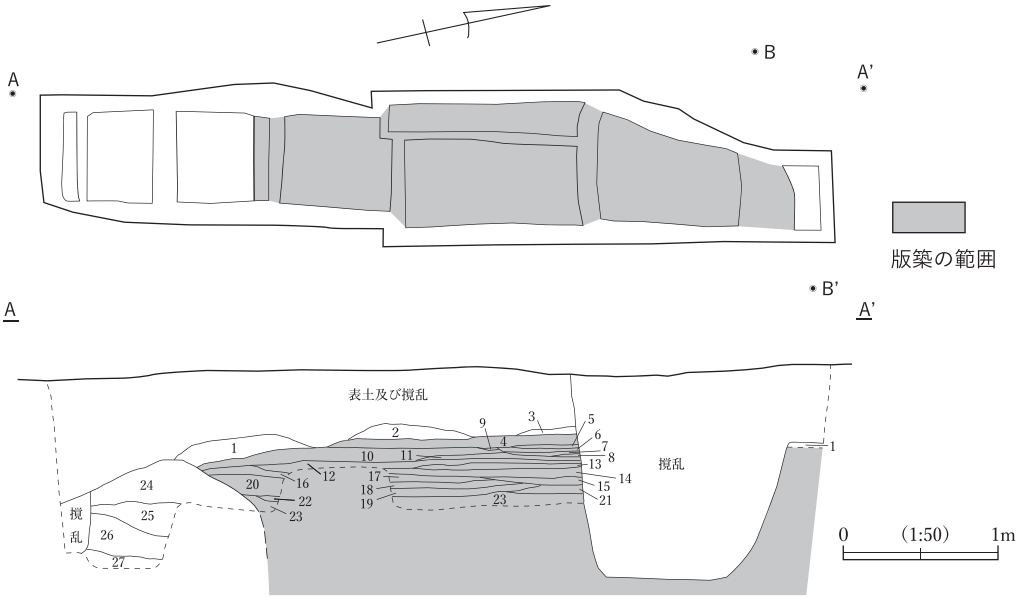
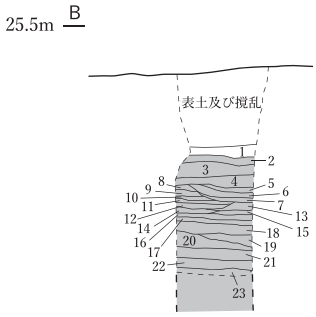

14
(7264)
15
(7263)
16
(隅切瓦)
13～16　T－4　表土一括
0　(1：6)　10 cm
0　(1：3)　10 cm

図８　Ｔ－１・３・４　出土遺物



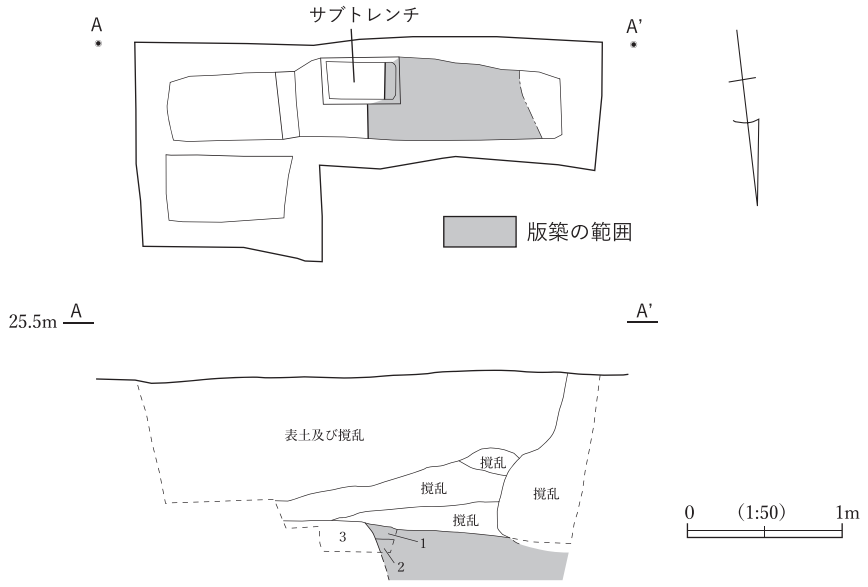

1　明褐色＋黒色ブロック：粘性・しまり強い。近現代整地層。
2　黒褐色：粘性・しまり強い。近現代整地層。
3　暗褐色：粘性・しまり強い。近現代整地層
4　明褐色：粘性・しまり強い。ローム土。
5　黒褐色：粘性・しまり強い。
6　暗褐色：粘性・しまり強い。明褐色ブロック少し含む。
7　黒褐色：粘性・しまり強い。5層よりは少し明るい。
8　明褐色：粘性・しまり強い。ローム土。
9　暗褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子少し含む。
10　黒褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子少し含む。11層よりやや明るい。
11　黒褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子少し含む。
12　暗褐色：粘性・しまり強い。ロームブロック全体的に多い。
13　暗褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子少し含む。
14　暗褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子少し含む。
15　黒褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子少し含む。
16　暗褐色：粘性・しまり強い。
17　暗褐色：粘性・しまり強い。ロームブロック多く含む。
18　褐　色：粘性・しまり強い。ローム粒子少し含む。
19　黒褐色：粘性・しまり強い。北側にローム粒子多い。
20　褐　色：粘性・しまり強い。ローム粒子やや多い。
21　暗褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子非常に多い。
22　黒褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子ごくわずかに含む。
23　暗褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子非常に多い。
24　黒褐色：粘性強いがしまりやや弱い。
25　黒褐色：粘性強いがしまりやや弱い。ロームブロック上層に多い。
26　黒褐色：粘性強いがしまりやや弱い。
27　褐　色：粘性強いがしまりやや弱い。ローム粒子多く，明るくみえる。
※　4～23層が版築。24～26層は旧表土，27層は遺構か。




1　黄褐色：粘性・しまり強い。近現代整地層。
2　黒褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子非常に多い。
3　明褐色：粘性・しまり強い。ローム層
4　黒褐色：粘性・しまり強い。ロームブロック非常に多い。
5　黒褐色：粘性・しまり強い。ロームブロック非常に多い。
6　黒褐色：粘性・しまり強い。5,6層に比べロームが少なく黒が多い。
7　黒褐色：粘性・しまり強い。7層よりさらにロームが少ない。ほぼ黒褐色土。
8　暗褐色：粘性・しまり強い。ロームブロック多い。
9　褐　色：粘性・しまり強い。黒褐色ブロック多い。
10　明褐色：粘性・しまり強い。
11　黒褐色ブロック＋明褐色ブロック：粘性・しまり強い。ブロック土で構成される土が粗い層。
12　明褐色：粘性・しまり強い。黒褐色ブロック多く含む。
13　褐　色：粘性・しまり強い。黒褐色ブロックと明褐色ブロック多く含む。
14　明褐色：粘性・しまり強い。ローム層だが黒褐色粒子少し含む。
15　明褐色：粘性・しまり強い。ローム層だが黒褐色ブロックやや多い。
16　明褐色：粘性・しまり強い。ローム層だが黒褐色粒子少し含む。
17　明褐色：粘性・しまり強い。ローム層だが黒褐色粒子少し含む。
18　明褐色：粘性・しまり強い。ローム層だが黒褐色粒子をごくわずかに含む。
19　明褐色：粘性・しまり強い。ローム層だが黒褐色粒子やや多く含む。
20　暗褐色：粘性・しまり強い。ロームブロック少し含む。
21　明褐色：粘性・しまり強い。黒褐色粒子を少し含むがほぼローム層。
22　暗褐色：粘性・しまり強い。ローム粒子を少し含むがほぼ暗褐色土。
23　ロームブロック＋黒褐色：粘性。しまり強い。両方の土が半々ぐらいからなる層。
※　2～23層が版築

図９　Ｔ－５　平面図及び土層図

れる旧表土（３層）に土器と瓦が含まれていたことである。35はＴ－６サブトレンチの旧表土から確認された内面黒色処理を行った土師器片である。小破片であることから年代の特定は困難であるが、少なくとも９世紀第Ⅱ四半期以降の遺物との指摘を受けている。旧表土中に含まれるものであることから、当遺構が建築された折にはすでにこれらの遺物が存在していたものと考えられ、遺構はそれよりは新しいと判断できる。その他、17～19はＴ－５において版築の検出時に確認されたものである。３点とも須恵器であり、17が蓋、18と19が坏である。17は




1　褐色＋暗褐色：粘性，しまり非常に強い。褐色ローム土を多く含み，全体的に明るい。版築。
2　褐色＋暗褐色：粘性，しまり非常に強い。暗褐色土を多く含み，全体的には暗い。版築。
3　黒　色：粘性，しまり強い。旧表土。土器や瓦を含んでいる。

図 10　Ｔ－６　平面図及び土層図

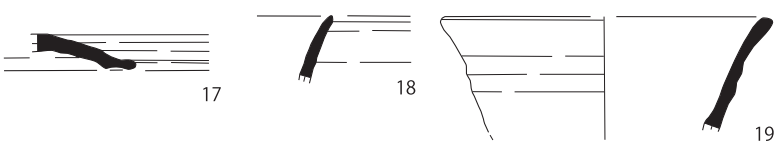
かえりを残すものであり 7 世紀末から 8 世紀前葉のものであろう。国分寺の時期とは合わない古い遺物である。19 は 9 世紀第Ⅱ四半期から第Ⅲ半期との指摘を受けている。29 は坩堝か。

－３　瓦

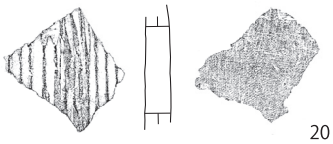
瓦については丸瓦 1439 点・平瓦 2387 点・軒丸瓦 40 点・軒平瓦 111 点・塼 54 点・熨斗瓦か 1 点・隅切瓦 3 点・円形瓦製品 1 点・瓦転用砥石 1 点・器種不明瓦 25 点の合計 4062 点が検出された。－ 1・2 で述べたように表層の攪乱が激しくほとんどが近現代の遺物が混入した状況の出土である。一方、わずかではあるが旧表土や版築から確認される遺物もあり、出土状況から遺構の年代に迫れるものもある。丸瓦と平瓦に関しては比では 1：1.66（軒丸瓦と軒平瓦を合わせると 1：1.69）となり平瓦がやや少ない傾向にあるが焼成前に加工された隅切瓦が 3 点あることから総瓦葺きであることは確実である。また、総括でも述べるように遺構は 9 世紀中葉以降のものであり、その点では国分寺の維持管理に関する貴重な資料であることから特徴を述べておく。

軒丸瓦に関しては 7109 型式が 13 点、7110 または 7111 型式が 9 点、型式不明が 18 点確認された。7110 と 7111 型式に関しては単弁の数が 14 枚か 13 枚かで区別を行うが主に外区のみの出土であり、外区珠文が圏線と重なるという特徴から 7109 型式の退化型式であるといえるのみで明確に区別ができない。点数でいうと 7109 型式と匹敵する数が検出されている。軒平瓦に関しては 7260 型式？ 1 点と、7263 型式が 8 点、7264 型式 8 点、型式不明が 94 点確認された。7260 型式（21）は創建期に使用されるものであるが、右外区に笵傷がみられるものは瓦塚窯跡の成果では 9 世紀前葉以降とされており、Ⅳ型式以降のものと考えれば矛盾はないが点数が少なく持ち込まれた可能性もある。また、この瓦には凸面に朱の付着があることも注目される。メインとなる軒平瓦は 7263・7264 型式ということにるがこれらは 7109・7110・7111 型式と組み合う瓦であり、点数でも 9 世紀中葉から 10 世紀前葉にかけて継続的に維持管理されていることは確実である。

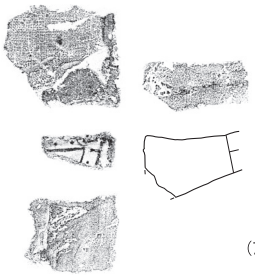
丸瓦に関しては 131 点が有段で玉縁の存在が確認できる。全体の 10％にも満たないが他の丸瓦についても桶巻きの痕跡がみられないことからほぼ全ての個体が有段丸瓦と考えられる。また、側面の加工については確認できる 386 点のうち 9 点（2.33％）に関して模骨に巻いた円筒状の粘土をはずし、2 分割した際にできる破断面が残されていた。平瓦に関しては確認できたものとしては 1 点（0.04％）が平行叩きのもの（20）であったが他は全て長縄叩きであった。また、桶巻きの痕跡は確認されず全て 1 枚造りである。また、側面の加工に関しては

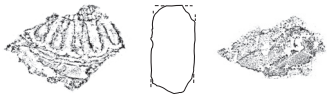


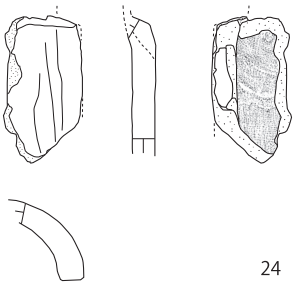

17 ～ 19　T－5　版築検出中

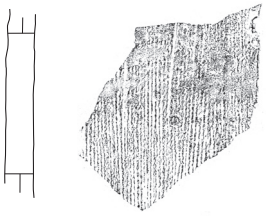


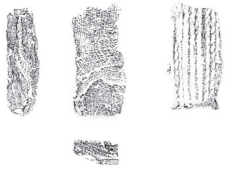

20　T－5　撹乱中

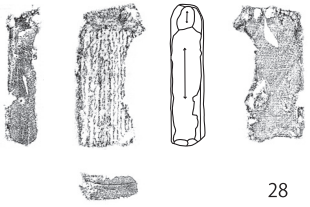


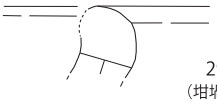





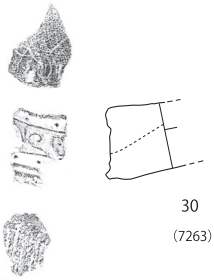


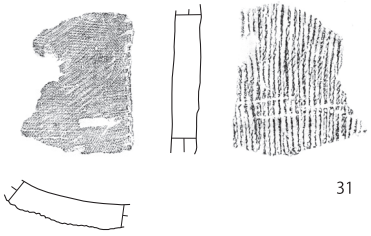



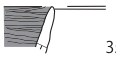


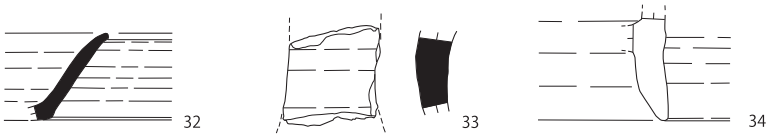

21 ～ 29　T－5　表土一括




30 ～ 34　T－6　表土一括
35　T－6　旧表土中



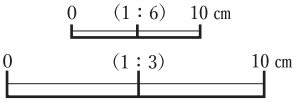




図 11　T－5・6　出土遺物

629 点が確認でき、そのうち凸面からみて側面が鋭角になるものが 19 点（3.02％）存在する。側面が 1 面であるが凸面からみて鈍角であるものが 355 点、側面が 2 面加工されるものが 245 点、3 面に加工されるものが 9 点、4 面加工されるものが 1 点で合計 96.98％を占める。この違いは遠江国の寺谷瓦窯の報告書で指摘されているように、凸型の成型台で凸面に叩きを施しそのまま側面の加工を行うか、凹型の成型台に移し替えたうえで側面部の加工を行うかどうかの違いである。移し替えなければ凸面からみて側縁部は鋭角となり、移し替えれば鈍角となる。したがって、約 97％の個体が 2 次成形を行っていると考えられる。つまり、2 分割時の破断面を残す丸瓦（2.33％）と二次成形を行わない平瓦（3.02％）が少数存在するが、この差が年代差なのか窯や工人の差なのかは今後出土瓦の精査を通して解明していく必要がある。また、側面の加工が確認できる 629 点のうち 1 点（0.16％）のみが側面に布目を確認できた（26）。これは凸型成型台の周囲に壁が立っており、そこに粘土を敷き詰める形で成形し、台から瓦を取り出すときに布目が着くものと指摘されている。ただし、側面は基本的にはヘラ切りによる成形を受けるため確認できる数が少なくどれぐらいの数が存在するのか今後の課題である。

塼に関しては比較的多数が出土している。完形品は存在せず 1 個体の法量は復元できない。そのため、図化もできなかった。製作技法としては団子状の粘土を箱型に詰め込むものと厚い粘土板を重ねるものが存在した。前者は 53 点、後者が 1 点である。やはり、主体を占めない技法により製作されるものが存在する。また、厚さが計測できるものが 30 点あり、厚さは平均で 6.3 ㎝である。これに ± 1 cm 程の厚さの間に収まる。今後の資料の増加に期待したい。

## 4　総　括

### ⑴　遺構の年代

遺構の年代に関して出土した遺物から考察を行う。まず、版築中より小破片ではあるが長縄叩き一枚造りの平瓦が検出されている点が重要である。これは当遺構の地盤改良の段階で既に瓦が散在している状況にあったことを示しており、少なくとも国分寺創建建期より遅れた時期の遺構であることが分かる。その他、版築中より確認した遺物をみると 1 の須恵器が 9 世紀前半、2 が 8 世紀後半から 9 世紀前半、12 が 8 世紀第Ⅳ四半期から 9 世紀第Ⅰ四半期、19 が 9 世紀第Ⅱ四半期から第Ⅲ四半期とのご教示を受けている。また、Ｔ－ 6 から検出された旧表土中の遺物（35）は小破片ながら内面が黒色処理されており、9 世紀第Ⅱ四半期以降の遺物である。つまり、当遺構の建設が開始された時期は地表面には既に 9 世紀第Ⅱ四半期以降の土器が散乱している状況であり、さらに版築中の遺物としては一番新しいもので 9 世紀第Ⅱ四半期から第Ⅲ四半期の遺物が含まれている状況である。これに対して出土した軒瓦の年代をみてみると 8・13・22 が 7109 型式、9・23 が 7110 または 7111 型式、10・15・30 が 7263 型式、14 が 7264 型式でる。7109 型式はかつて黒澤彰哉により資料紹介されたものと同様のものであるが、瓦塚窯跡の調査において 7109 型式の生産時期が 9 世紀中葉から後葉とされており版築中の遺物の年代と矛盾はない。以上のことから、当遺構に関しては 9 世紀中葉ごろに建設された遺構であると判断できる。なお、1 点ではあるが常滑焼の口縁部が確認されている（34）。7 から 8 型式に相当し、14 世紀のものと指摘を受けている。中世の常陸国分寺については考古学的にはまだ資料が少ないがその点では貴重な資料である。

### ⑵　遺構の性格

当遺構に関してはまずいわゆる掘込地業を持つ地下遺構であるという特徴を持つ。さらに、隅切瓦の存在から礎石立総瓦葺建物の存在は確実である。規模については地業の東側と南側は確認されたものの西側、北側が調査を行った敷地外まで広がることから一辺が 15 m以上であるということ以外確定ができない。そこで、過去の調査から版築の深さを比較してみたい。平成 24 年度の回廊の調査において、常陸国分寺跡の回廊が幅 9 mの複廊であることが確認されているが、この時の掘込地業の深さは 0.6 m、また昭和 57 年の金堂跡（平成 28 年度の調査で東西幅が 33 m程度と確認されている）の調査においては旧表土から掘り込まれた地業の深さは 1.4 mとある。さらに、

昭和 53 年の鐘楼（南北 15 mとされる）の調査においては旧地表面から 0.9 mの深さの版築が確認されている。回廊と鐘楼の規模の比較は困難な部分があるが、概ね規模の大きい施設ほど上屋も重量が大きく、地盤改良の深さも深くなるといえそうである。したがって、今回検出された遺構に関しては旧表土より 1.4 mの版築が確認されていることから、金堂に匹敵する規模を有していた可能性が高い。

### ⑶　まとめ

以上のことから当遺構が一辺 15 m以上を誇り、さらに金堂に匹敵する掘込地業を有する総瓦葺きの遺構であると判断できた。さらに、年代が出土遺物から 9 世紀中葉以降であることも従来の研究との矛盾がないことも判明した。そして、当地に残る地名「ガラミドウ」が「伽藍の塔」から転訛したものと考えると、この遺構は従来黒澤彰哉が述べていたように建て替えられた塔跡である可能性が高いといえる。また、これまでの調査のなかで国分寺の伽藍を構成する重要遺構としては経蔵及び南門、塔が確認されていないが経蔵や南門に関しては位置的にも考えづらく消去法的にも塔跡といえるだろう。

今後は当遺構の平面規模の確定を目指すとともに、創建期の塔跡や南門跡の確認調査をすすめ、常陸国分寺跡のさらなる解明をはかっていきたい。

### 参考文献


広瀬栄一・角田文次 1938「常陸国分寺」『国分寺の研究』上巻

今泉義文 1971「がらみ堂のこと」『常陸国分寺の塔心礎』石岡市郷土資料 37　石岡史蹟保存会

斎藤　忠 1981『常陸国分僧寺の堂塔跡と寺域の研究』斎藤考古学研究所紀要第 1　吉川弘文館

黒澤彰哉 2019「常陸国府系瓦の成立と展開－昼間・宮原論文の検証を中心として－」『婆良岐考古』41

小杉山大輔 2020「特別史跡常陸国分寺跡近年の発掘調査」『第 42 回茨城県考古学協会研究発表会資料』茨城県考古学協会

石岡市教育委員会 1983『常陸国分僧寺跡発掘調査報告Ⅱ－金堂跡・講堂跡の確認調査－』

石岡市史編さん委員会 1983『石岡市史』中巻Ⅰ

石岡市教育委員会 2011『市内遺跡調査報告書』6

磐田市教育委員会 2019『寺谷瓦窯跡』

# Ⅱ　小目代遺跡（第 6 地点－ 3）

## 1　調査の経過

### ⑴　調査にいたる経緯

小目代遺跡は、恋瀬川と山王川に挟まれた台地上に所在する（遺跡番号 08-205-107）。古代茨城郡の郡寺・茨城廃寺跡を含むほか、在庁官人に由来する考えられる遺称地が集中する（図 12）。

第 6 地点（石岡市貝地二丁目 1980 番）は、茨城廃寺跡の寺院地区画溝の北 50m 内外のところに位置する（図 13）。平成 24 年 4 月 24 日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書の提出があり、市教育委員会では平成 25 年 5 月 10･11 日に試掘調査を行った。開発区域に 12 ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認したところ、奈良・平安時代や中世の遺構を確認した（第 6 地点－ 1）。

本書で報告する第 6 地点－ 3（石岡市貝地二丁目 1980 番 1）は第 6 地点の西部分にあたり、平成 24 年 12 月 2 日付けで茨城県教育委員会あて「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。茨城県教育委員会より 12 月 18 日付けで申請建物及び周辺の給排水管部分については工事着手前に発掘調査を実施するように、これ以外の給排水管部分については市教育委員会が立会うように通知があった。

なお、第 6 地点の東部分については、平成 24 年 6 月に発掘調査を実施している（第 6 地点－ 2）。

### ⑵　調査の経過・方法

発掘調査は、上記の茨城県教育委員会からの通知を受け、平成 25 年 1 月 8 日から 17 日にかけて実施した。調査対象地は申請建物及び周辺の給排水管部分（A 区）、浄化槽部分（B 区）で、調査面積は 65 ㎡である。表土剥ぎ及び埋め戻しは重機にて行い、その他の作業は人力にて行った。

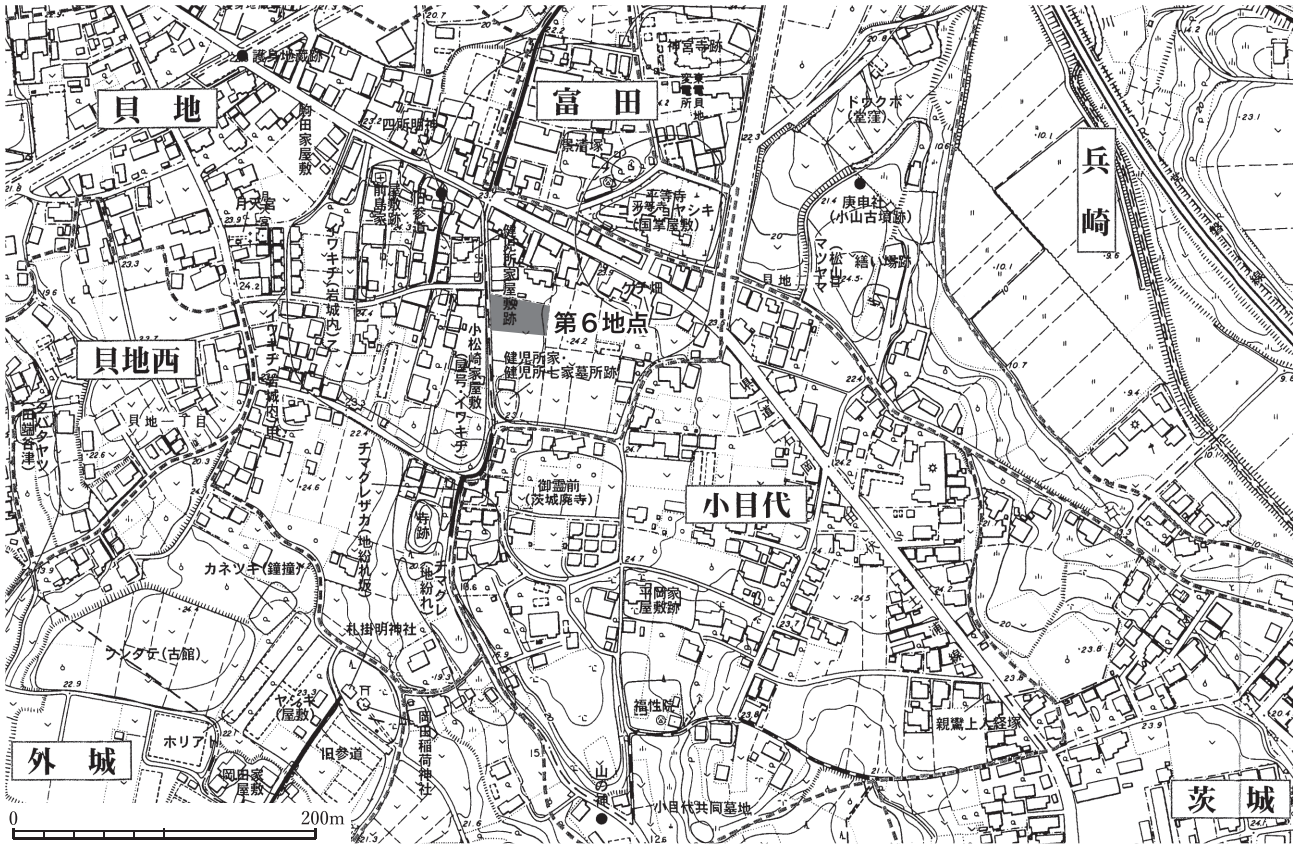



図 12　小目代遺跡（第 6 地点）の位置と周辺の地名・伝承（S=1/5,000）（有賀・小佐野・高橋・皆川 2004）

## 2　調査の成果

### (1) 遺　構

調査地は撹乱が激しく、特にＢ区のほとんどは撹乱されていた。検出した遺構はピット 20 基で、規模等の詳細は表２のとおりである。遺物の出土が少なく、個々の遺構の時期は特定しがたいが、遺構の覆土の状況等からは中

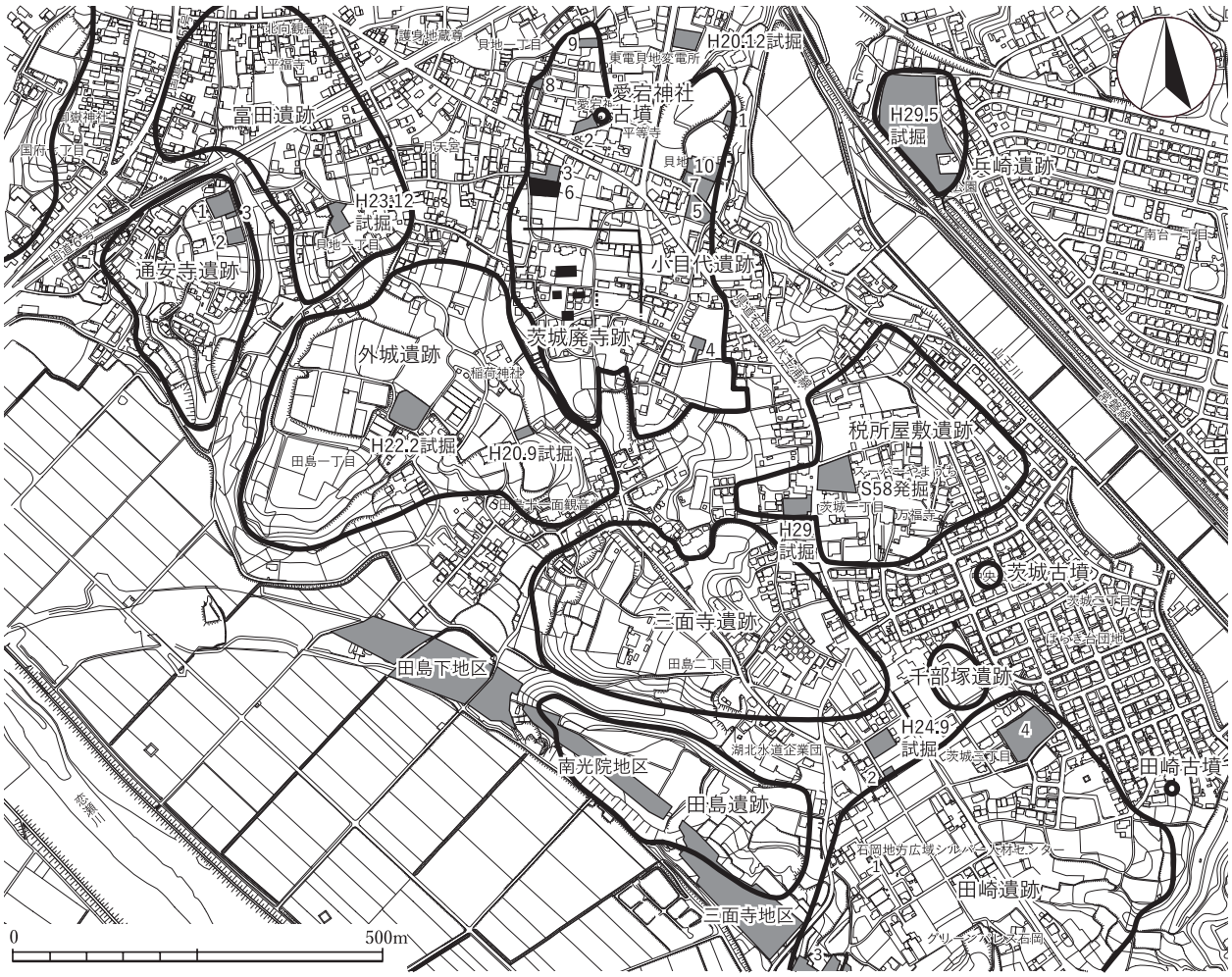



図 13　小目代遺跡　調査地点位置図（S=1/10,000）

表 1　小目代遺跡　調査履歴一覧

| 調査地点 | 次 | 調査年度 | 調査種類 | 所在地 | 調査原因 | 調査期間 | 主な遺構（時期・遺物） | 報告 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第 1 地点 | | H14 | 試掘 | 貝地 2 丁目 3503 ほか | 宅地造成 | 20020902 | なし | |
| 第 2 地点 | | H16 | 試掘<br>発掘 | 貝地 2 丁目 1972-1 | 公民館類似施設建設 | 20040517 ～ 20040518<br>20040715 ～ 20040807 | 竪穴建物（9 世紀後半）・溝（中世）・土坑 | 市内遺跡 3<br>市内遺跡 5 |
| 第 3 地点 | | H16 | 試掘 | 貝地 2 丁目 1977-1 | 個人住宅建設 | 20040522 ～ 20040524 | 溝（16 世紀？）・杭列 | 市内遺跡 3 |
| 第 4 地点 | | H19 | 試掘 | 貝地 2 丁目 5064-6 ほか | 個人住宅建設 | 20070816 | 竪穴建物 | 市内遺跡 4 |
| 第 5 地点 | | H23 | 試掘 | 貝地 2 丁目 5042-1 | 賃貸住宅建設 | 20111206 | なし | 市内遺跡 8 |
| 第 6 地点 | － 1 | H24 | 試掘 | 貝地 2 丁目 1980 | 宅地分譲 | 20120510 ～ 20120511 | 土坑・ピット | 市内遺跡 9 |
| 第 6 地点 | － 2 | H24 | 発掘 | 貝地 2 丁目 1980-2 | 個人住宅建設 | 20120605 ～ 20120619 | 溝・土坑・ピット | |
| 第 6 地点 | － 3 | H24 | 発掘 | 貝地 2 丁目 1980-1 | 個人住宅建設 | 20130108 ～ 20130117 | ピット | 本書 |
| 第 7 地点 | | H27 | 試掘 | 貝地 2 丁目 3499 の一部 | 集合住宅建設 | 20150721 | なし | |
| 第 8 地点 | | H27<br>H28 | 試掘<br>発掘 | 貝地 1 丁目 1597-2 の一部 | 個人住宅建設 | 20160309<br>20160415 ～ 20160419 | 竪穴建物・土坑 | |
| 第 9 地点 | | H28 | 試掘<br>発掘 | 貝地 2 丁目 1966 の一部 | 個人住宅建設 | 20160720<br>20160815 ～ 20160825 | 竪穴建物（9 世紀後半）・溝 | |
| 第 10 地点 | | H29 | 試掘 | 貝地 2 丁目 3499-1 の一部 | 集合住宅建設 | 20170529 | なし | |

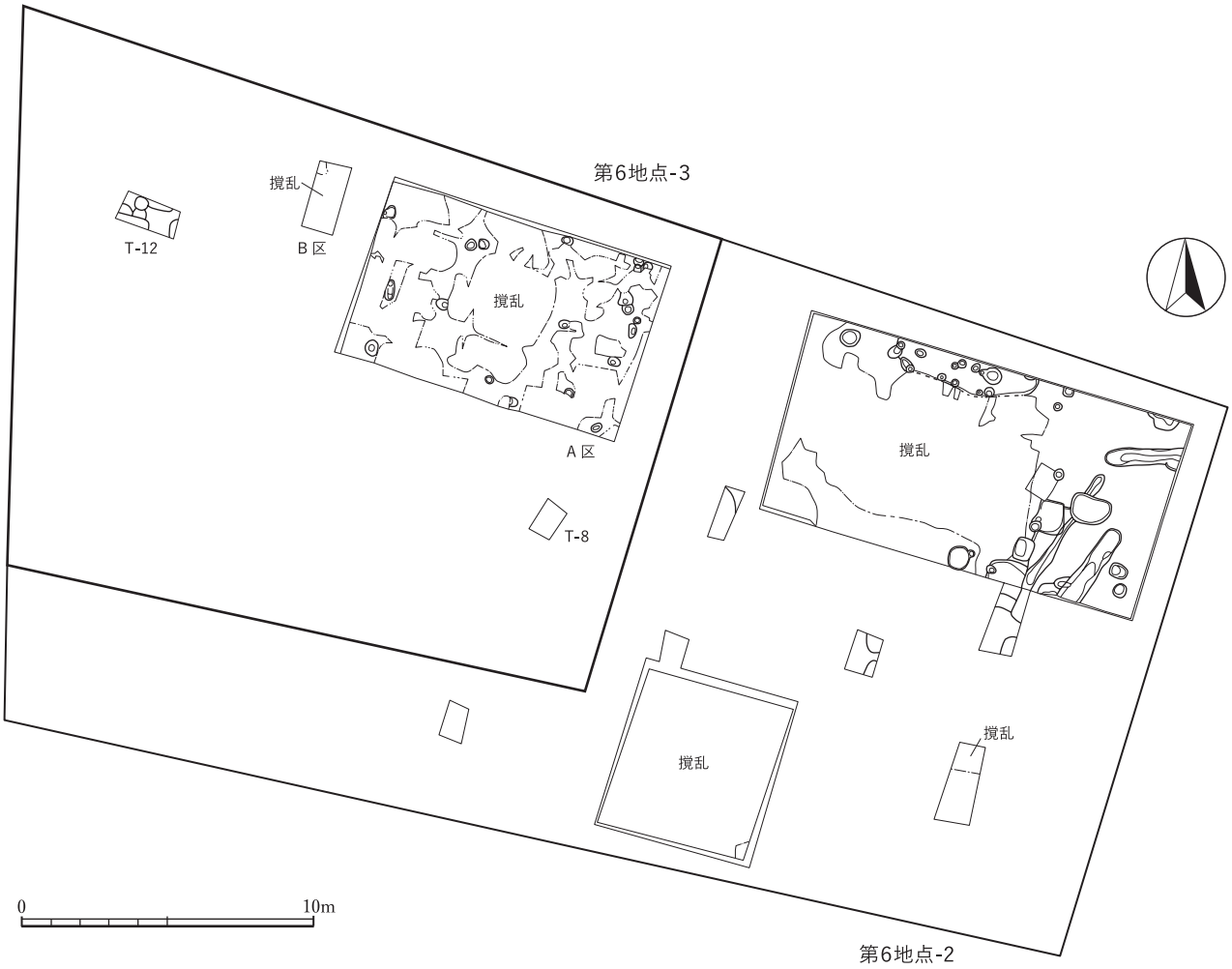



図 14　小目代遺跡（第６地点）全体図（S=1/250）

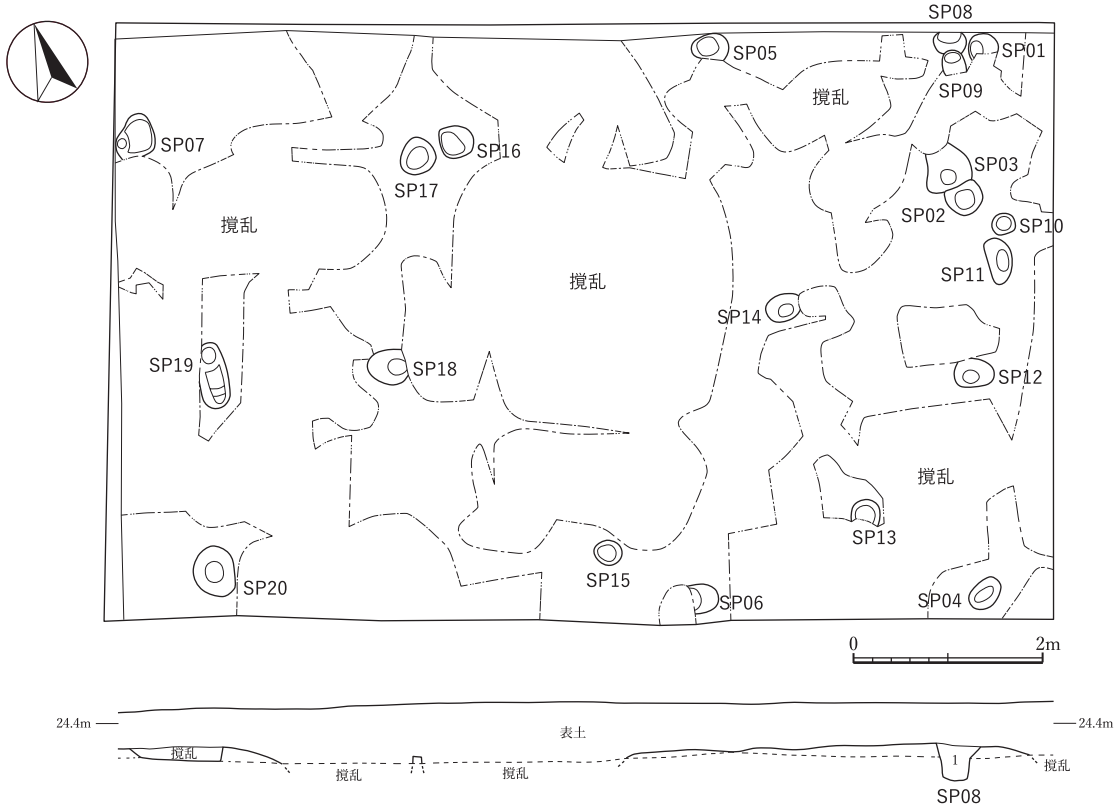



図 15　小目代遺跡（第６地点－３）全体図・北壁セクション図（S=1/80）

世～近世が主体と考えられる。

### (2) 遺　物

遺構および表土、遺構検出時に、古代の土師器・須恵器、中世～近世の土師質土器、時期不明の砥石が出土している。そのうち6点を掲載した（図16・表3）。

## 3 総　括

本書で報告してきた小目代遺跡の第6地点－3は、撹乱が激しかったものの、検出できた遺構はピット20基の

表2　小目代遺跡　遺構一覧

| 遺構番号 | 平面形 | 長軸×短軸(m) | 深さ(m) | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| SP01 | 円形 | 0.33 ×(0.2) | 0.27 | 土師質土器 | |
| SP02 | 円形 | 0.38 × 0.32 | 0.38 | 土師質土器 | SP03 →本跡 |
| SP03 | 不定形 | 0.55 ×(0.50) | 0.44 | 土師質土器 | 本跡→ SP02 |
| SP04 | 楕円形 | 0.38 × 0.27 | 0.18 | 須恵器 | |
| SP05 | 楕円形 | 0.39 ×(0.25) | 0.41 | 須恵器・砥石 | |
| SP06 | 楕円形 | (0.26)× 0.31 | 0.14 | 土師器 | |
| SP07 | 不定形 | (0.47)× 0.43 | 0.33 | 土師質土器 | |
| SP08 | 楕円形 | 0.36 ×(0.22) | 0.37 | | 本跡→ SP09 |
| SP09 | 楕円形 | (0.25)× 0.26 | 0.48 | | SP08 →本跡 |
| SP10 | 円形 | 0.26 × 0.23 | 0.19 | | |
| SP11 | 不定形 | 0.49 × 0.27 | 0.15 | | |
| SP12 | 楕円形 | 0.42 × 0.31 | 0.40 | | |
| SP13 | 円形 | 0.30 ×(0.23) | 0.23 | | |
| SP14 | 楕円形 | (0.35)× 0.29 | 0.19 | | |
| SP15 | 円形 | 0.29 × 0.26 | 0.24 | | |
| SP16 | 隅丸方形 | 0.36 × 0.34 | 0.53 | | |
| SP17 | 円形 | 0.40 × 0.36 | 0.23 | | |
| SP18 | 楕円形 | (0.40)× 0.38 | 0.57 | | |
| SP19 | 楕円形 | 0.70 × 0.31 | 0.58 | | |
| SP20 | 楕円形 | 0.55 × 0.43 | 0.17 | | |

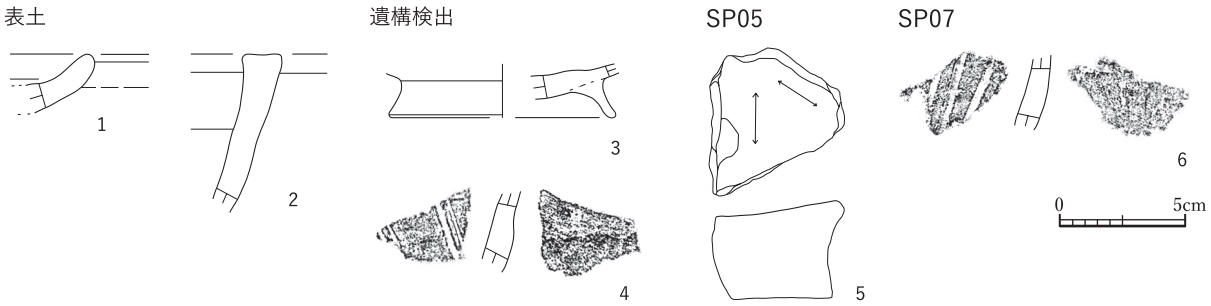



図16　小目代遺跡　出土遺物（S=1/3）

表3　小目代遺跡　出土遺物観察表

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土場所 | 種別 | 法量（cm） | | | 焼成 | 残存率 | 色調 | | 含有物、備考等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | | 外面 | 内面 | |
| 図16-1 | 図版6 | 表土 | 土師質土器・皿 | - | - | (2.3) | 良好 | - | 橙褐 | 橙褐 | 白色粒（極小・少）・透明粒（極小）・赤褐色粒（極小･微）･砂粒（極小･微）･角閃石 |
| 図16-2 | 図版6 | 表土 | 土師質土器・鍋 | - | - | (6.2) | 良好 | - | 黒褐 | 暗淡褐 | 白色粒（極小・少）・砂粒（～小・少）・白雲母（極小）・赤色粒（～大）・透明粒（極小） |
| 図16-3 | 図版6 | 遺構検出 | 土師器・高台杯 | - | <8.6> | (2.1) | 良好 | 25% | 暗褐～黒褐 | 黒褐～黒 | 白色粒（極小・少）・透明粒（極小）・赤色粒（～大・微）・骨針（～小・微）、内面炭素吸着による黒色処理 |
| 図16-4 | 図版6 | 遺構検出 | 土師質土器・擂鉢 | - | - | (3.2) | 良好 | - | 暗褐～黒褐 | 暗褐～黒褐 | 白色粒（～小）・砂粒（極小・少）・赤色粒（極小・少）・骨針（極小・微）・白雲母 |
| 図16-5 | 図版6 | SP05 | 砥石 | - | - | - | - | - | - | - | 重量121g |
| 図16-6 | 図版6 | SP07 | 土師質土器・擂鉢 | - | - | (3) | 良好 | - | 橙褐 | 橙褐 | 白色粒（極小）・赤色粒（～小・少）・砂粒（～小･少）･透明粒･黒雲母（小･微） |

みであった。個々の遺構の時期は特定しがたいが、中世～近世が主体と考えられる。出土遺物も古代の土師器・須恵器が含まれるものの、中世～近世が主体であった。また、第6地点－3の東側にあたる第6地点－2については現在整理中であるが、同様の傾向である。

さて、第6地点の南には古代茨城郡の郡寺・茨城廃寺跡が存在し、寺院地区画溝は第6地点の南50m内外に位置する。寺院地区画溝の周辺では僧房と考えられる竪穴建物群が濃密に分布する。しかし、本報告地点を含む第6地点では古代の遺構・遺物は希薄であり、中世～近世が主体となる。また、その北側の第3地点では16世紀代の溝と杭列が確認されている。古代とそれ以降における土地利用の変化について考える必要があるだろう。

また、周辺には健児所家屋敷跡や墓所跡をはじめ、在庁官人の遺称地が集中する。すでにこれら遺称地等からの景観復元は行われているところであるが（有賀・小佐野・高橋・皆川2004）、発掘調査の成果を合わせることで、より豊かな復元を行うことができるだろう（図17）。

**引用文献**

有賀和成・小佐野浅子・高橋修・皆川昌三2004「常陸府中現況調査概報Ⅰ」『茨城大学中世史研究』1

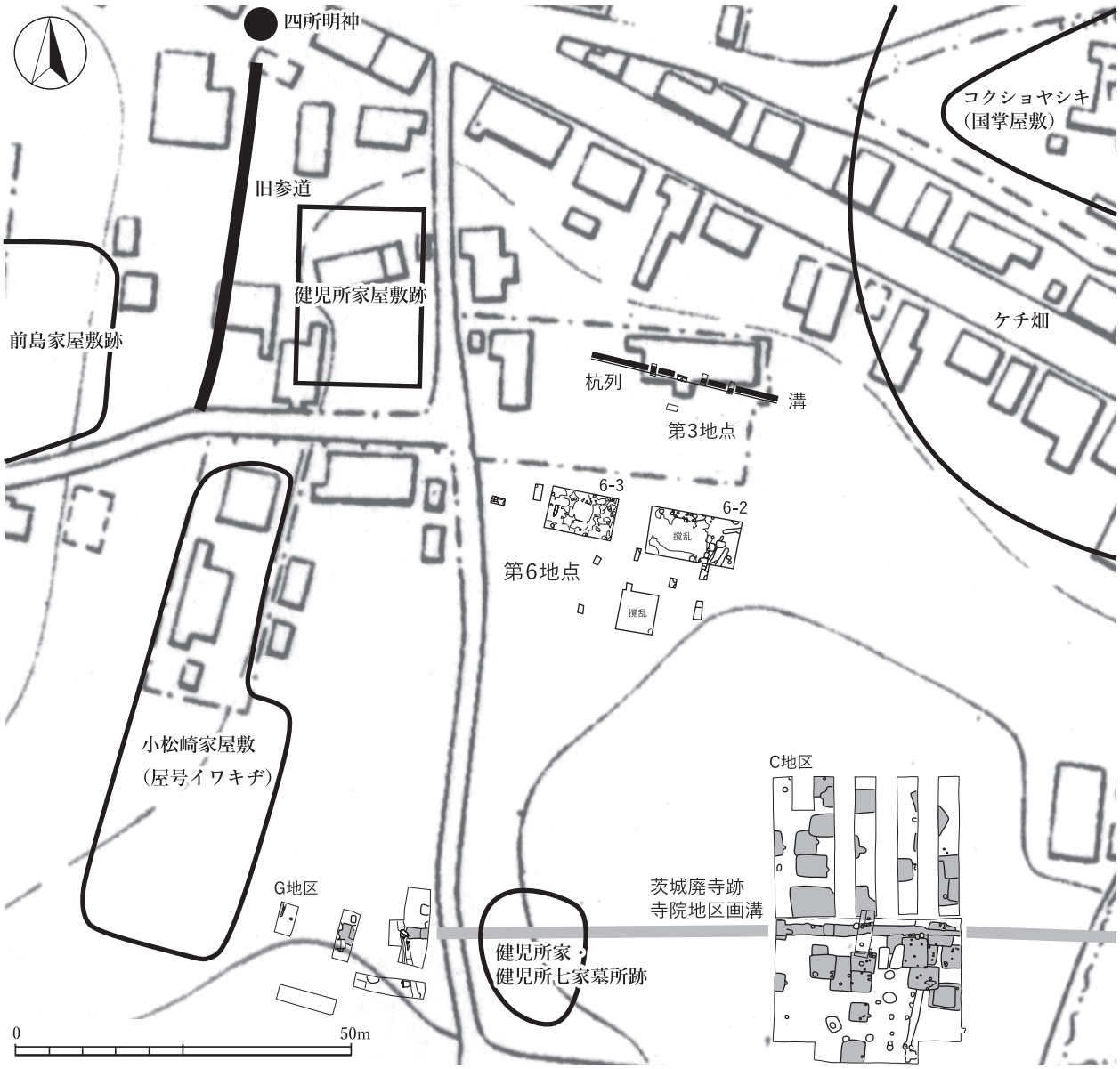



図17　小目代遺跡（第6地点）周辺の遺構と伝承（S=1/1,000）
（昭和35年都市計画図に有賀・小佐野・高橋・皆川2004および調査地点を合成・トレース）

# Ⅲ　埋蔵文化財包蔵地の新規登録と範囲変更（令和３年度）

石岡市内には現在 401 箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在する。これらの範囲を示すものとして、『石岡市遺跡分布調査報告』（石岡市教育委員会・石岡市遺跡分布調査会 2001）および『茨城県遺跡地図』（茨城県教育委員会 2001）が発行されている。だが、発行後の現地踏査や試掘調査などによって新規発見や範囲変更が生じていることから、平成 24 年度までの新規発見・範囲変更については『市内遺跡調査報告書　第 8 集』（2013 年）、平成 25・26 年度については『市内遺跡調査報告書　第 10 集』（2015 年）、平成 27 年度から令和 2 年度分については『市内遺跡調査報告書　第 12 集』（2021 年）に報告した。今号ではそれらに続き、令和 3 年度（令和 4 年 2 月末まで）の新規発見・範囲変更について、一覧表の形で報告する。なお、包蔵地の位置や範囲については既存のものを含め、「いばらきデジタルマップ」で公開している。

**新規発見**

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 新規登録年度 |
|---|---|---|---|---|---|
| 463-149 | 大増下根遺跡 | 大増字下根 594 外 | 縄文、中世 | 包蔵地 | 令和 3 年度 |
| 463-150 | 大塚和内遺跡 | 大塚字和内 1838 外 | 縄文 | 包蔵地 | 令和 3 年度 |

**範囲変更**

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 範囲変更年度 |
|---|---|---|---|---|---|
| 205-029 | 木間塚遺跡 | 杉並四丁目 6-15 外 | 縄文、奈良・平安、中世、近世 | 包蔵地 | 令和 3 年度 |
| 205-109 | 税所屋敷遺跡 | 茨城一丁目 12-21 外 | 縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世 | 集落跡 | 令和 3 年度 |

常陸国分寺跡

1. T-1・2（東から）

2. T-2（西から）

3. T-1 版築掘り込み（南から）

4. T-1 版築の様子（南西から）

写真図版２

常陸国分寺跡

1. T-3・4（東から）

2. T-3・4 版築中土器（図 8-12）出土状況（南から）

3. T-3・4 版築東端部（東から）

常陸国分寺跡

2. T-5（南から）

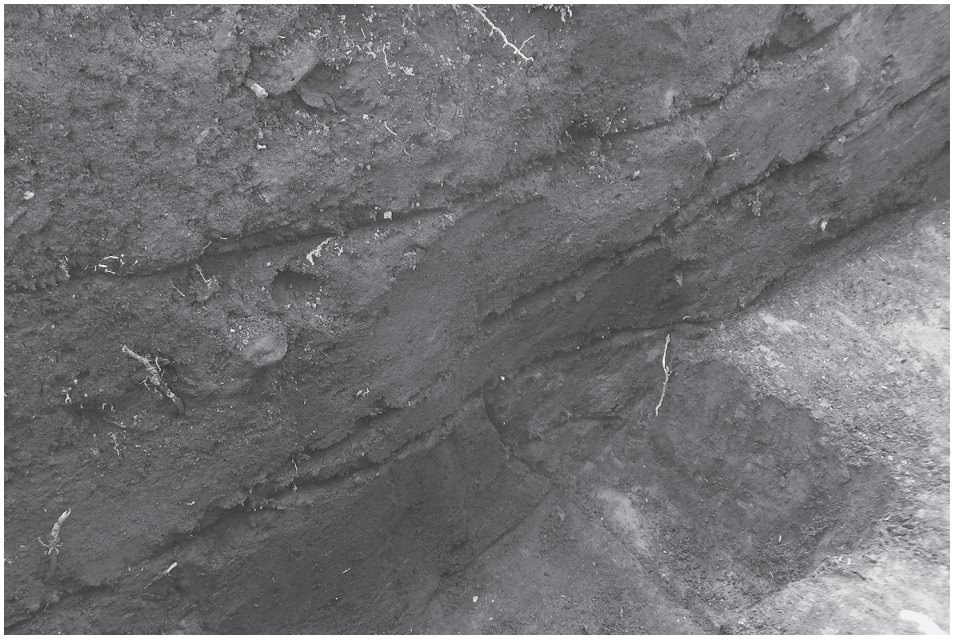
3. T-5 版築（南から）

4. T-5 版築の様子
（北東から）

# 写真図版４

常陸国分寺跡

1. T-6 版築東端部（東から）



2. T-6 版築土層（北東から）

3. ガラミドウ地区全景（北東隅から）

4. ガラミドウ地区全景（南西から）

常陸国分寺跡

図 11-21

図 8-9

図 8-15

図 8-13

図 8-16

図 8-14

図 11-35

図 8-12

図 8-10

図 8-7

T-5 版築土中出土銅滓

# 写真図版６

## 小目代遺跡

1．全景（西から）

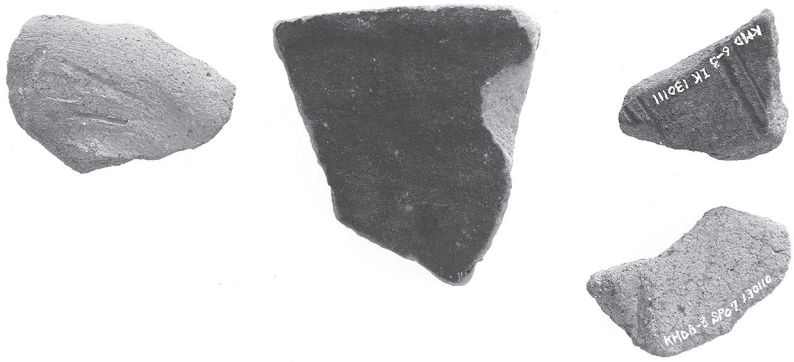


図 16-1･2･4･6　２～４．出土遺物

図 16-3

図 16-5

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | しないいせきちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 市内遺跡調査報告書 |
| 副書名 | 第13集 |
| シリーズ名 | 石岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | |
| 編著名者 | 谷仲俊雄（編著）・小杉山大輔（著） |
| 編集機関 | 石岡市教育委員会 |
| 所在地 | 〒315-0195　茨城県石岡市柿岡5680番地1　TEL 0299-43-1111（代）　FAX 0299-43-1117 |
| 発行年月日 | 2022（令和4）年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積<br>㎡ | 発掘原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ひたちこくぶんじあと<br>常陸国分寺跡<br>（ガラミドウ地区） | いばらきけんいしおかしふちゅう<br>茨城県石岡市府中三丁目 | 08205 | 067 | 36度<br>11分<br>44秒 | 140度<br>16分<br>32秒 | 20191009<br>～<br>20200106<br>20210208<br>～<br>20210409 | 20.06 | 保存目的の重要遺構確認調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 常陸国分寺跡 | 寺院 | 奈良・平安時代、中世 | 版築遺構 | 瓦、土師器、須恵器、常滑焼銅製品、近現代陶磁器 | 特別史跡常陸国分寺跡に関する重要遺構（塔跡か）の確認 |

| | |
|---|---|
| 要約 | 当地は地名・過去の調査研究により常陸国分寺跡の塔跡の推定地となっていたことから、常陸国分寺跡保存活用計画の策定にあたり調査の必要が生じた。調査の結果、一辺15m以上、深さ1.4mに及ぶ版築遺構が確認された。遺構の残存状況が悪く、創建時の地表面は未確認であり、確認された遺構が基壇なのか掘込地業なのかは判断できていない。版築内から平瓦片が出土している。過去の研究成果を含め、確認されている軒丸瓦は二〇葉蓮華文軒丸瓦（7109）を主体としており9世紀中葉以降のものである。また、版築中や遺構に伴う土器に関して一番新しいもので9世紀第Ⅱ四半期以降に出土する内面に黒色処理を施した土師器片が存在する。また、過去の常陸国分寺跡の調査から当遺構の版築の深さは金堂跡に匹敵する大規模なものであることから、国分寺創建期のものではない、9世紀中葉頃に新たに建設された塔跡である可能性が高い。 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積<br>㎡ | 発掘原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| こもくだいいせき<br>小目代遺跡<br>（第6地点－3） | いばらきけんいしおかしかいじ<br>茨城県石岡市貝地二丁目 | 08205 | 107 | 36度<br>11分<br>02秒 | 140度<br>16分<br>46秒 | 20130108<br>～<br>20130117 | 65 | 個人住宅建設に伴う記録保存調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小目代遺跡 | 集落 | 奈良・平安時代、中世、近世 | ピット20 | 土師器、須恵器、土師質土器、石製品 | 中近世を主体とするピット群を検出した。 |

| | |
|---|---|
| 要約 | 恋瀬川と山王川に挟まれた台地上に位置し、調査地点は古代茨城郡の郡寺・茨城廃寺跡の寺院地区画溝の北50m内外に位置する。しかし、撹乱が激しかったものの、検出できた遺構は中世～近世を主体するピット群だけであった。調査地点の周辺には健児所家屋敷跡や墓所跡をはじめ在庁官人の遺称地が集中しており、土地利用や景観復元等の検討の基礎資料となる。 |

# 市内遺跡調査報告書
# 第１３集

2022（令和４）年３月31日発行

編集　石岡市教育委員会　文化振興課
発行　石岡市教育委員会
〒315－0195　茨城県石岡市柿岡5680番地１
TEL　0299－43－1111(代)
FAX　0299－43－1117

印刷　共和印刷株式会社
〒315－0001　茨城県石岡市石岡2747－68